

- 2 新型コロナウイルス対策 3つの「密」を避けて
- 2 ミュージカル『アニー』
- 3 休日当番医・接骨院

市民が創る、太田市ガイドブック 「OTA magazine」を発刊しました



モデル/KIKI 撮影/佐野学 ヘアメイク/草場妙子

2ページに続く

こんにちは 市長です

「えーっと、あれ？なんだっけ」「あれって、あれか？」「そうなんだよ。あれがあつたからうまくいったよ」「良かったね」。別に誰に聞かせるわけではなくこれで2人だけの世界が出来上がる。春の暖かくなり始めたころのほんわかした光景である。田舎のあぜ道を歩く2人の老人が昔話をしている。あうんの呼吸というか、そこに漂う空気ですの成り行きを理解し合えるのである。その時の状況(空気)を共有しているということが必須条件で固有名詞は必要としない。第三者には何のこともさはさっぱり分からない。これほど複雑な社会でなかったからこれに近い日常はあったのだろう。言葉の数が少なかったこともゆくりした社会を後押ししていた。「濃厚接触」「クラスター」「パンデミック」など難しい言葉たちとは遠く離れた良き時代があった▼「あれが」とか「ああ〜思い出せない」とか、忘れたってさほど困らないならそれでいいではないか。子どもの頃には「忘れること」があつてはならないと詰め込めるだけ詰め込んだ。詰め込みっばなしではテストができない。速く答えが出せるように塾などにも行った。一夜漬けであろうと「おれは知識が頭に詰まっているぞ」と主張できなければ希望する学校には入れない。年を重ねるにつれて頭は目詰まりになって知識を放出し続けることになる。「ああ〜思い出せない」ならスマホを見ればいいわけで、むしろ頭は空き家になる。そこまでいくと「考えが飛躍しすぎる」と批判されそうだが、近い将来、頭の空白にどんな創造力を持っているかが問われる入試に変わるかもしれない▼思い出せないことに引け目を感じない、「あれとこれ」で通じるゆったりとした生活もいいな、と思っていくことの方がどんなにか幸せかもしれない。

